

徒歩による観光を目的とした山古志地区における 景観資源の調査と分析(第2報)

プロジェクト2 研究員
東洋大学総合情報学部 准教授
小瀬 博之

1.研究の背景と目的

2004年10月23日に発生した新潟県中越地震から5年以上が経過し、甚大な被害を受けた新潟県長岡市山古志地区（旧山古志村）は、震災時の被害箇所の復旧をほぼ終え、修復された法面や付替道路、砂防堰堤、また修復又は建て替えられた住宅が建ち並ぶほかは、元の景観や暮らしが回復しており、被災状況を留めるものは木籠集落のダムに残る住宅を除けばほとんどない状態である。

これまで被災状況や復興状況の視察、そして復興支援活動を受けてきた山古志地区であるが、復興にかかる経済的又は人的な支援には限りがあることから、地区全体及び各集落における自立可能な生活と復興後の外部とのコミュニケーションを検討し、実行していかなければならない。

東洋大学は、震災直後から学生ボランティアの派遣をはじめとして、地区とのさまざまなコミュニケーションを実施してきた。しかし、2005年の災害ボランティアから4年以上が経過して当時の大学生はほぼ卒業してしまい、2007年まで続いた災害ボランティアを経験した学生も、来年度末に卒業を迎えると地区と大学とのコミュニケーションを維持することが難しくなる。他の支援団体等も同様の問題があるものと思われる。今後の地区の発展を考えた場合、これらの支援者に対する継続的なコミュニケーションとともに、新たな来訪者を惹きつけることが必要である。

山古志地区においては、景観の維持・保全が地域の復興や発展に重要な役割を果たすものと考えられ、文化的景観を維持するための棚田・棚池の保全や眺望景観の整備、祭りなど伝統文化の維持も含めて、景観計画を考えていく必要がある。

表-1 これまでに山古志地区で行った調査等の概要

No.	年月日	内容	主な訪問先（集落）
1	2005年 5月27日	被災状況の視察	山古志会館・大久保・池谷・虫亀
2	2005年 8月12～16日	被災状況の調査 （住宅・道路等）	種苧原・虫亀・櫛木・池谷
3	2005年 9月8～11日	災害ボランティア活動 （住宅の片付け等）	虫亀・種苧原
4	2006年 8月14～17日	復興状況の調査 （住宅・道路等）	梶金を除く地区全域・山古志支所（長岡ニュータウン）
5	2006年 8月25～28日	災害ボランティア活動 （支所移転準備等）	長岡市仮設住宅・虫亀・山古志支所
6	2007年 6月6日	復興状況の視察及びヒアリング	山古志会館・木籠・竹沢
7	2007年 9月5・6日	復興状況の調査 （住宅・道路等）	地区全域
8	2007年 11月1日	徒歩による景観調査	竹沢・山中・油夫
9	2007年 11月21日	山古志住民会議との会合	山古志会館
10	2007年12月 21・22日	冬の景観・観光・生活に関するヒアリング	山古志支所・竹沢
11	2008年 3月10・11日	冬の景観調査	地区全域
12	2008年 3月22日	大学連携による地域づくりシンポジウムへの参加	山古志会館
13	2008年 6月6日	徒歩による景観調査	大久保・池谷・櫛木・木籠
14	2008年 9月27・28日	「山古志ウォーク」における景観調査及び参加者へのアンケート調査	竹沢・間内平・山中・虫亀・金倉山
15	2008年 11月3日	産業まつりへの参加及び寺野バイパスの景観踏査・ヒアリング	四季の里古志・種苧原・池谷・大久保・山古志サテライト
16	2009年 1月9・10日	冬の景観・観光・生活に関するヒアリング	虫亀・山古志サテライト・古志高原スキー場
17	2009年 4月11日	山古志住民会議への参加	山古志支所・あまやち会館
18	2009年 9月18・19日	「山古志ウォーク」における景観調査及び参加者へのアンケート調査	山古志支所・虫亀・萱峠・種苧原・池谷・大久保・櫛木・木籠・梶金・竹沢
19	2010年 1月10・11日	冬の景観調査及びヒアリング	山古志サテライト・木籠・梶金・虫亀・竹沢・中山トンネル

筆者等の研究グループがこれまでに山古志地区で行ってきた調査等の概要を表-1に示す。筆者は、東洋大学特別研究「山古志村復興支援に関する総合的研究」の研究グループに関わり、震災の復旧がほとんどなされていなかった2005年5月山古志地区の視察を始めとして、同年8月の復旧前の住宅や道路の被災状況の調査、同年9月のボランティア活動への参加、2006年8月の復興過程の調査及び仮設住宅をベースとした災害ボランティア活動を行った。ここまでの研究成果は、参考文献1)にまとめられている。また、福祉社会開発研究センタープロジェクト2の景観計画研究グループに所属してから、アメニティ（総合快適性）を評価基準とした景観ポイントの抽出を目的として、2007年9月・11月・12月の復旧が進んだ段階での学生による徒歩踏査、2008年3月の冬期における景観調査を実施した。この研究成果は、参考文献2)にまとめられている。

また、2008年6月に学生の徒歩踏査による景観評価、同年9月に「山古志ウオーク」に際しての事前調査とイベントでのアンケート調査、同年11月に再度学生の徒歩踏査による景観評価、2009年1月に冬期における景観や生活に関する住民等へのヒアリング調査を実施した。これらの研究成果は、参考文献3)にまとめられている。

今年度は、前年度に続き2009年9月に「山古志ウオーク」に際しての事前調査とイベントでのアンケート調査を実施するとともに、2010年1月にヒアリングと賽の神への参加、徒歩による現地踏査を実施した。

本報は、前年度の『徒歩による観光を目的とした山古志地区における景観資源の調査と分析』の続報として、主に今年度実施した調査に関する集計、分析結果を報告する。

2.研究の方法

2.1 「山古志ウオーク」に先立つ現地踏査

前年度に引き続き、2009年9月19日に新潟県ウォーキング協会主催による「越後長岡ツデーマーチ 山古志ウオーク」が開催された。そこで、来訪者から見た山古志地区の景観を把握することを目的として、事前の現地踏査と行事当日の参加者へのアンケート調査を行った。

同行事では、前年度とは異なるロングコース（山古志支所→桂谷→虫亀→風口峠→萱峠展望台→種苧原→池谷→大久保→山古志支所の23km）とショートコース（山古志支所→竹沢→古志高原スキー場→梶金→木籠→檜木→池谷→大久保→羽黒トンネル→山古志支所の11km）の2つのコースが設定された。

そこで、それぞれのコースを開催前日の9月18日に3つのグループで分担（ロングコースは萱峠展望台を境に2グループで分担）して歩き、主要な景観要素及び場所を話し合いながら撮影し、撮影場所を地図に記録した。そして、撮影した写真から主要な景観として、アンケートに用いるロングコース16か所、ショートコース12か所の写真を抽出し、会場に置くパネルを作成した。山古志ウオークのルート及び写真の撮影場所をロングコースについては図-1に、ショートコースについては図-2に示す。また、選定した写真を写真-1～写真-28に示す。



図-1ロングコース（23km）と写真撮影場所 4)に加筆



図-2 ショートコース (11km) と写真撮影場所 4)に加筆



写真-1 ロングコースNo.1 写真-2 ロングコースNo.2



写真-3 ロングコースNo.3 写真-4 ロングコースNo.4



写真-5 ロングコースNo.5 写真-6 ロングコースNo.6



写真-7 ロングコースNo.7 写真-8 ロングコースNo.8



写真-9 ロングコースNo.9 写真-10 ロングコースNo.10



写真-11 ロングコースNo.11 写真-12 ロングコースNo.12



写真-13 ロングコースNo.13 写真-14 ロングコースNo.14



写真-15 ロングコースNo.15 写真-16 ロングコースNo.16



写真-17 ショートコースNo.1 写真-18 ショートコースNo.2



写真-19 ショートコースNo.3 写真-20 ショートコースNo.4



写真-21 ショートコースNo.5 写真-22 ショートコースNo.6



写真-23 ショートコースNo.7 写真-24 ショートコースNo.8



写真-25 ショートコースNo.9 写真-26 ショートコースNo.10



写真-27 ショートコースNo.11 写真-28 ショートコースNo.12

2.2 アンケート調査

山古志ウオークの参加者は、911人（ロングコース365人、ショートコース546人）となった。このうち、アンケートに回答してもらったのは65人（ロングコース26人、ショートコース39人）で、参加者数に対する回答者数の割合は7.1%であった。アンケート項目の概要を表-2に、アンケートの実施概要及び回答者属性を表-3に、会場におけるアンケートの様子を写真-29に示す。

表-2 アンケート項目の概要

山古志の風景についての質問	
1	歩いたコースに沿った風景において良かった場所、悪かった場所 （複数回答可） [写真番号及び全体的な印象・状況・選んだ理由]
2	山古志の風景について感じたこと、風景を守るため、または良くするためにどうすればよいか、今回のイベントを通じて気づいた点など（自由記入）
回答者属性	
1	性別
2	年代
3	居住地（都道府県・市区町村・山古志地区に居住する方は集落）
4	山古志への来訪回数
5	山古志ウオークの所要時間

表-3 アンケートの実施概要及び回答者属性

実施概要		実施日	2009年9月19日（土曜日）		
参加者数		911人（ロングコース365人、ショートコース546人）			
場所		山古志ウオークゴール付近（長岡市山古志会館前）			
方法		山古志ウオークの完歩者にアンケートを依頼			
回答者属性		ロングコース	ショートコース	計	
計		26	39	65	
性別	男性	11	22	33	
	女性	13	17	30	
	未記入	2	0	2	
年代	10歳未満	0	1	1	
	10代	0	2	2	
	20代	1	0	1	
	30代	2	2	4	
	40代	2	6	8	
	50代	4	7	11	
	60代	10	12	22	
	70代	6	8	14	
	未回答	1	1	2	
居住地	新潟県	13	28	41	
	栃木県	1	3	4	
	東京都	2	2	4	
	神奈川県	2	1	3	
	埼玉県	1	1	2	
	宮城県	1	1	2	
	千葉県	2	0	2	
	香川県	0	1	1	
	兵庫県	0	1	1	
	山形県	0	1	1	
	岐阜県	1	0	1	
	富山県	1	0	1	
	福島県	1	0	1	
	北海道	1	0	1	
山古志への来訪回数	初めて	15	18	33	
	2回目	3	6	9	
	3～5回	4	11	15	
	6～10回	1	2	3	
	それ以上	1	0	1	
	未回答	2	2	4	
山古志ウオークの所要時間	2時間代	1	18	19	
	3時間代	1	18	19	
	4時間代	6	1	7	
	5時間代	10	1	11	
	6時間代	2	0	2	
	未回答	6	1	7	



写真-29 アンケート実施の様子

2.3 冬期における調査

2009年1月9・10日及び2010年1月10・11日に山古志地区を訪問し、旧山古志村長で現衆議院議員・学校法人東洋大学理事長の長島忠美氏（2009年調査）、地域復興支援センター山古志サテライト主任支援員の井上洋氏（2010年調査）等にヒアリング調査を行った。また、2010年の調査では、木籠集落と梶金集落の賽の神（どんど焼き）に参加した。さらに、山古志支所から山古志トンネル手前までの徒歩による踏査を行って、冬の景観に関する主要な要素を抽出した。

3. 「山古志ウオーク」における調査結果

3.1 景観要素の概況

9月18日の現地踏査で確認した主要な景観要素について記す。ロングコースについては、路肩が草丈の高い草でおおわれ、眺望が阻害されている場所が多かった（写真-30）。

植物については、ルートを通じてススキの穂が見られたほか、旧山古志村の花であったハギの花や旧山古志村の木であったブナの実が見られ、その他、アジサイの花、ヤマウルシの紅葉、ノブドウの緑色の実、チャノキの緑色の実、ヨウシュヤマゴボウの黒紫色の実、ミズキの黒紫色の実、キリの実などが見られた。イネは稲穂が垂れて、棚田は黄緑色から黄色に近い様相であった。イネの一部は刈り取られ、はさ掛けされているものもあった（写真-3）。コいの養殖池は水が張っ

てある状態であった（写真-1等）。一部の場所では地すべりの復旧工事が進められていて、大規模に法面修復されている場所も見られた（写真-32）。

ショートコースについても、おおよそ上記と同様の景観要素であるが、斜面沿いや川沿いの谷であるために開けた景観となっている場所が多かった（写真-21等）。ダムができた旧木籠集落は、ダムにある枯れた立ち木（写真-22）、自動車（写真-23）、住宅（写真-24）などが地震発生時の被害の状態をとどめていた。また、一部の斜面は修復されておらず地すべりしたままの状態になっていた（写真-27）。



写真-30 路肩は草で覆われる 写真-31 旧山古志村の花「ハギ」



写真-32 旧山古志村の木「ブナ」 写真-32 大規模な法面修復

3.2 アンケート結果

山古志ウオークの参加者へのアンケート結果のうち、景観の「良かった場所」「悪かった場所」をそれぞれ集計して表4に示す。

ロングコースで最も良かった場所として指摘が多かったのはNo.7（写真-7）であった。山を上る途中での先を見下ろす景観としてとても良い評価であった。それぞれの感想を見ると棚田に関する感想が多い。特に高いところから見下ろす棚田の並ぶ姿により評価が集まっている。実施時期が9月で、稲が刈り取られていないため、黄金色の棚田がとてもきれいに見える状況であった。

ショートコースにおいて良かった場所は、同様に棚田・棚池が多かったが、最も票数が多かったのはNo.8の木籠集落において水没災害にあった家屋（写真-24）であった。現時点では、家屋が修復や建て替えが進み、倒壊した家屋の姿は他にはほとんどない。新潟県中越地震の爪痕が鮮明に残っていて、そのころの震災の激しさや恐怖、厳しさが脳裏によみがえってくるという意見もあった。しばらくその場で眺めて涙を流した方もいた。回答ではこのまま残してほしいという意見が多かった。

一方、悪かった場所は、両コースともに多くの回答者が「ない」と回答した。地震によって崩れた山、復興によって戻ってきた緑、いまだに埋まっている家屋、被害にあわずそのまま残っている自然、それぞれが今の山古志の景観ということどこも悪いという印象は受けないようである。

なお、復旧のためにまだ作業中の重機のあることについての指摘があった。また、道路やトンネルを通ると、空気が汚くあまりいい気分にならないという意見もあった。

表-4 アンケートの回答者数

ロングコース	良い	悪い	ショートコース	良い	悪い
No.1	3	0	No.1	1	0
No.2	1	1	No.2	2	0
No.3	4	0	No.3	7	0
No.4	0	0	No.4	3	0
No.5	0	1	No.5	3	0
No.6	9	0	No.6	3	0
No.7	10	0	No.7	5	2
No.8	7	2	No.8	10	0
No.9	3	1	No.9	4	0
No.10	3	0	No.10	0	0
No.11	2	0	No.11	3	8
No.12	8	1	No.12	5	3
No.13	5	1			
No.14	4	0			
No.15	1	1			
No.16	2	2			
すべて	1	0	すべて	1	0
なし	0	5	なし	0	11
無回答	0	12	無回答	0	17

4.冬の景観調査の結果

4.1 冬期における景観要素の概況

2009年1月10日と2010年1月11日では、同時期でも積雪深が大きく異なっており、2009年は50cmほどであった積雪が、2010年は200cmほどになっていて、景観は大きく異なっていた（写真-33）。

2010年の冬の景観は、ほぼ雪の白色で占められていると言ってよい状況であり、道路脇は、除雪による雪も含めて雪の壁で覆われており、積雪のないときと比較すると道路からの見通しは大きく制限されていた（写真-34）。

また、2010年1月の調査時は晴天であったが、晴天日は極端に少なく、この日は、この年で初めての晴天であるということであった。

冬期の景観上のアクセントは、スギの枝葉の緑色と樹木に乗る雪が作り出す模様であり、また、時折見える眺望のよい場所から眺める金倉山などの山並みである（写真-35）。また、カキやキリの実に鳥が集まっているのを見かけた（写真-36）。これも貴重な景観資源といえる。

賽の神は、わらや竹で作られたもので、これに火をつけて無病息災を願うものである。短冊や習字を燃やしたり、スルメやもちを焼いたりする風景は、昔から伝承されている文化的風景である（写真-37）。



写真-33 2009年1月10日(左)と2010年1月11日(右)の比較(虫亀集落)



写真-34 2007年11月（左）と比較して2010年1月の写真は路肩に雪が積もり、先が見通せない



写真-35 竹沢から金倉山を望む 写真-36 カキを食べるカラス



写真-37 賽の神（左は木籠集落、右は梶金集落）

4.2 ヒアリング結果

2009年1月に実施した長島忠美氏へのヒアリング結果の概要を次に記す。

山古志の景観の特徴は、人が暮らしているからこそ作り出すことができる景観であり、人がいて、生業で手を加えるからこそ保つことができる景観である。よって、景観についても、今までの生活を保ち、土地開発などは行わずに食糧の生産を行い、農村の長所を引き出すような発展性が重要である。

来訪者は、長岡市内等近隣からが多く、山の暮らしの体験等を目的とする宿泊が地震の後に多くなっている。地震の復興作業のために訪れた近隣住民等がその景観や生活感に興味を持ったためと考えられる。

観光資源としては、都会の生活で疲れた人が、周り

の自然やその中を歩きまわることによって心地よさを感じることができる村であればよいと考える。また、農村留学者を受け入れて、農村生活の知識でなく体験を与える環境を整備していくことが必要である。

2010年1月に実施した井上洋氏へのヒアリング結果の概要を次に記す。

震災後の景観の変化について、棚田・棚池、道路とも原状回復が原則であるが、棚田・棚池の土地の境界が不明なところは地主同士で調整して農地を重機で回復させた。道路については、山古志トンネルと寺野バイパスが新しく作られた。

モデル住宅は、自力再建で作られた住宅での採用が少なかった。これは、好きなように作りたいという思いがあるものと思われるが、新築でなく建て起こしなどして直して使うことことも多かったためである。

長岡市では、棚田、屋根の高さ、丸車庫の色などの景観に関する「山古志地域デザインガイドライン」を策定しているが、周知が十分になされておらず、住宅については、景観への配慮までには至っていないのが現状である。

山古志の住民は地域の観光資源に気づいていない。外から訪れる人のことは、観光客ではなく来訪者や視察者であるという認識を持っている。今後、棚田等の風景や食文化などの地域資源を生かしていくのが課題である。1～2日の農業体験では、楽しみを見出せない。ディズニーランドのようなスポットはないため、山古志らしい観光を見出す必要がある。

雪の暮らしは、なにもできないことにある。外に飲みにもいけないので、家族と過ごす時間が多くなる。火を使う賽の神は、雪の中だからできる行事である。除雪は、雪のないときより毎日1時間は早く起きて擦る必要がある。少子高齢化の進行で雪下ろしもたいへんで、助けあいの「結」（ゆい）の持続もたいへんである。今後はシルバー人材センターなどの有償ボランティアの検討も必要であるが、山古志の人は農作業をたくさんするために、そのようなことに従事する人はいないと思われる。

支えあい田舎の宝であり、人間としては、田舎は住みやすいところであるといえる。各集落には区長がいて、集落の人の確認ができる。地震のときも2日間で全員の居場所が確認できた。日本は行政が管理する戸籍制度があるが、山古志は集落単位の「結」の中で暮らしている。

東洋大学の学生がボランティアに多数来て関わりあいを持っているが、今後についての考えは人によって異なっている。学生が魅力的なものを見つけたらそれを外部に伝えてほしい。情報をホームページで報告することや、集落と連携して情報発信するなど重要である。木籠集落は14世帯であるが、たくさんの人が賽の神に訪れた。たくさんの人の気力が祭りに込められている。来て参加すること、集落単位との関わりを強めることが重要である。

学生は、距離、交通、経済的問題等から山古志を訪れるのは難しい。フィールドが山古志でなくてもよいが、5年間の歴史は重く、山古志に来る努力をしてほしい。

山古志の今後を考える上で、どうやって農業を続けていくことができるかは重要である。生業が成り立たなくなり耕作放棄地が増えている。農業が続けられなければ山に暮らす意味はなくなってしまうかもしれない。農業技術の向上や生産、販売などを共同体で行う工夫も必要である。

上記の通り、話は景観にとどまらず、農業や生活の維持、内外での交流の必要性などの多岐にわたった。両氏の話に共通するのは、山古志の景観の維持には生業が欠かせず、人口減少と高齢化の進行の中で、外の人とのつながりを農業によって持続させることが重要であることを強調していることである。震災後にできたさまざまな支援者や組織とのつながりを、農業や食文化を通じて保ち、情報発信を行って魅力を外部へ伝えて活力をつけることが、景観の維持にも重要であることを理解した。

5. 結論及び今後の課題

本研究では、学生を同行しての複数回の山古志地区への訪問、徒歩による現地踏査、ヒアリングによって、山古志地区の景観の特徴及び景観の維持のために必要なことを明らかにするとともに、前年度に続き、山古志ウォークでのアンケート調査により、山古志ウォークのルートにおける来訪者から見た良い景観を見いだすことができた。

山古志地区は、棚田・棚池、山林など、農業によって維持されている景観が特徴であり、農業の維持が山古志地区の景観の維持に不可欠であるということを再確認することができた。また、来訪者も棚田・棚池に対する景観のよさを評価しており、これらが重要な景観資源となっていることがわかった。この景観の維持のため、来訪者を長期的に受け入れる工夫が求められていること、来訪者が山古志地区のことを情報発信して、山の暮らしをアピールすることの必要性も明らかとなった。

今後の研究課題を次に記す。

国道291号線の新字賀地橋から小松倉集落を抜けて中山トンネルまでの徒歩による踏査をもって、主要道路からの沿道景観の調査及びその場所の抽出と地図へのプロットを終えることになる。次年度はこの作業を進めて、山古志地区全体における主要景観のマッピングを行いたい。

また、前年度の研究におけるアンケート調査でも住民にとっての自慢としてあげられていた四季の風景や植物（農作物）、そして催事や食文化など、季節や時間によって異なる景観の特徴を、文献調査やヒアリング等によってまとめて情報を整理していきたい。

さらに、東洋大学学生ボランティアと地域との交流についての情報を整理して、地域の維持のためにこれまで5年間続いてきた山古志地区と外部の人々との関係を、今後どのように継続していけばよいのかを見出していきたい。

【謝辞】

本研究を進めるにあたっては、環境建設学科4年生の遠藤憲泰君をはじめとして、小瀬研究室の大学院生及び4年生8名（2008年度石田裕樹君、2009年度中山幸久君、中川邦昭君、染野将希君、松澤孝明君、小室佑典君、横倉剛君、長島辰夫君）、環境建設学科3年生の環境建設学演習III履修者8名（2008年度冬期：平田麻純君、須藤大知君、小田桐慧君、2009年度冬期：川田剛史君、柴田翔君、佐藤祐樹君、山口唯さん、江角温子さん）の協力を得た。

また、長島忠美氏、井上洋氏等、現地でのヒアリングに対応いただいた山古志地区の方々、山古志ウオークにおいてアンケートに協力していただいた方々、主催者・長岡市のスタッフの方々等に、この場を借りて謝意を表する。

【参考文献】

- 1) 三宮優・小瀬博之：山古志地区における震災後の景観復興状況に関する調査研究、第9回工業技術研究所研究講演会予稿集、pp.48-49、2007/2
- 2) 小瀬博之：中山間地域における景観づくりに関する研究～学生の山古志地区でのまちあるき調査による景観の現状と課題の把握～、平成19年度 東洋大学福祉社会開発センター 成果報告書、pp.87-97、2008/3
- 3) 小瀬博之：徒歩による観光を目的とした山古志地区における景観資源の調査と分析、福祉社会開発研究No.2、pp.141-148、東洋大学福祉社会開発研究センター、2009/3
- 4) 新潟県ウォーキング協会：「2009越後長岡ツーデーマーチ・山古志&良寛ウオーク」パンフレット